

## 小学生向け漢字ドリル指導法を 教員志望学生が学ぶための講義パッケージの開発†

仲間 妙\*<sup>1</sup>・佐藤和紀\*<sup>2</sup>・梶本佳照\*<sup>3</sup>・磯崎ひろみ\*<sup>4</sup>・高橋 純\*<sup>1</sup>

東京学芸大学教育学部\*<sup>1</sup>・常葉大学教育学部\*<sup>2</sup>

新見公立短期大学幼児教育学科\*<sup>3</sup>・株式会社教育同人社\*<sup>4</sup>

教員志望学生を対象に、小学生向け漢字ドリル指導法を学ぶための講義パッケージを開発し実施した。講義内容は、漢字ドリルの基礎知識を学び、模範授業映像の視聴後、指導法を練習するものであった。講義の事前事後に漢字ドリル指導の自信や、講義から学んだこと、さらに学びたいことは何かを明らかにする質問紙調査を行った。その結果、漢字ドリル指導の自信向上が見られた(研究1)。また、本講義が漢字ドリル指導のイメージを具体的に伝えることに効果的なことが示唆された。さらに、授業以外での指導法などについての講義も求められる可能性も示唆された。また、感想の共有や指導法の練習が、学びにつながった可能性が考えられた(研究2)。

キーワード：教員養成、漢字指導、漢字ドリル指導、講義パッケージ、授業設計

### 1. はじめに

文部科学省(2017)の「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」において、教職課程には実践性が求められている。このことから、教員養成段階において、学生が従来以上に実践的かつ能動的に指導法を学ぶ必要があると考えられる。また、我が国では、漢字の読み書きは基礎的・基本的な知識・技能として重要視されている。しかし、学校教材活用指導法研究

会(2014)が実施した調査では、教員は授業場面での漢字の具体的な指導法に悩んでいることが明らかとなった。さらに、堀田(2015)によれば、漢字は、繰り返し学習による定着を要する学習内容である。また、繰り返しの学習には、漢字ドリルが有効である(石塚2003)。従って、教員志望の学生が、漢字ドリルを用いた漢字の指導法を学ぶことは、意義があると考えられる(なお、本研究では、「漢字ドリルを用いた漢字の指導」のことを「漢字ドリル指導」と呼ぶこととする)。教員養成段階の漢字指導に関する先行研究として、田中(2014)が、学生に部首の知識を身につけさせる研究を行っている。しかし、児童への指導法を、どのように講義するかについての検討は行っていない。教員志望の学生を対象とした、児童への指導法の講義に関する研究としては、佐藤ほか(2017)の「情報モラル教育」の講義があった。そこで、今回は佐藤ほか(2017)の研究方法を参考にして開発・実践を行った。本研究では、教員志望の学生を対象に、小学生向け漢字ドリル指導法を、実践的かつ能動的に学ぶための講義パッケージを開発し、実践した。今回は、その講義パッケージの効果を、学生の漢字ドリル指導の自信の変化(研究1)と、学生が、講義から漢字ドリル指導について、特に学んだこと・さらに学びたいと思ったこと(研究2)から検証することとした。

2018年4月2日受理

† Tae NAKAMA\*<sup>1</sup>, Kazunori SATO\*<sup>2</sup>, Yoshiteru KAJIMOTO\*<sup>3</sup>, Hiromi ISOZAKI\*<sup>4</sup> and Jun TAKAHASHI\*<sup>1</sup>: Development of a Lecture for Students of Teacher Training Course to Teach Kanji Using Kanji-workbook for Elementary School Students.

\*<sup>1</sup> Faculty of Education, Tokyo Gakugei University 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501 Japan

\*<sup>2</sup> Faculty of Education, Tokoha University, 6-1 Yayoi-cho, Suruga-ku, Sizuoka-shi, Sizuoka, 422-8581 Japan

\*<sup>3</sup> Department of Early Childhood Education, Niimi College 1263-2, Nishigata, Niimi-shi, Okayama, 718-0017 Japan

\*<sup>4</sup> KyoikuDojinsha Co., Ltd. 4-21-1, Higashiikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, 170-0013 Japan

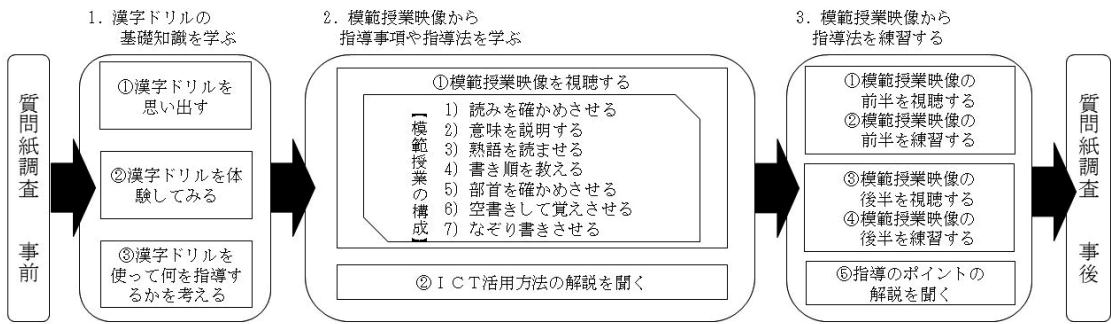


図1 実施した講義の構成および実験計画

## 2. 実践した講義の概要

教員志望の学生に、小学生向け漢字ドリル指導法を学習させるため、次の3つのステップからなる講義を開発した(図1)。その際、学生が実践的かつ能動的に学べるよう、指導法や指導事例などを知識として学ぶだけでなく、実際に指導法を練習するなど、体験的な学習も取り入れた。

- 漢字ドリルの基礎知識を学ぶ
  - 漢字ドリルがどういったものであったかを思い出してもらおうため、漢字ドリルを使った思い出を話し合う。
  - 個人でドリルを体験し、体験の感想をグループと全体で共有する。
  - 漢字ドリルを使っての指導内容を考え、ワークシートに記入し、グループで共有後、全体で、指導する内容を詳しく確認する。
- 模範授業映像から指導事項・指導法を学ぶ
  - 指導内容を確認しながら模範授業映像を視聴し、感想を共有し、その後、指導順序を確認しながら、再度模範授業映像を視聴する。
  - ICTの活用方法の解説を聞く。
- 模範授業映像から指導法を練習する
  - 教師の言葉に注目して、模範授業映像の前半を視聴する。
  - ペアで模範授業映像の前半を練習する。
  - 教師の言葉に注目して、模範授業映像の後半を視聴する。
  - ペアで模範授業映像の後半を練習する。
  - 指導のポイントの解説を聞く。

## 3. 講義パッケージの構成

大学教員が講義でそのまま利用できるよう、以下の3つのコンテンツをパッケージ化した。

- 講義スライド(発話セリフ付き)
- 模範授業映像
- ワークシート

## 4. 研究 1

### 4.1. 研究の方法

#### 4.1.1. 調査対象および調査時期

調査対象はX国立大学教育学部の講義を受講する2年生(20名)と、Y私立大学教育学部の講義を受講する3年生(27名)の計47名であった。標本数を多くするため2か所で講義を行った。調査時期は2017年6月～7月であった。

#### 4.1.2. 評価の方法

学生の漢字ドリル指導への自信の変化を測定するため、講義の事前・事後に質問紙調査を行った。質問紙は2問で構成した(表1)。4件法で質問し、4:かなり、3:だいたい、2:あまり、1:まったく、とした。その後、質問項目の平均値が、講義の事前と事後でどのように変化したかを比較した。講義スライドの発話セリフ、ワークシートを同じにするなど、極力同じ講義が再現できるようにしたため、2か所で行われた講義を同様の効果が期待できる講義とみなして分析した。

### 4.2. 結果

質問紙調査の結果、全ての項目で講義前よりも講義後の平均点が高かった(質問項目1事前  $M=2.28$  ( $SD=0.61$ ) 事後  $M=3.13$  ( $SD=0.39$ ), 質問項目2事前  $M=2.09$  ( $SD=0.54$ ) 事後  $M=2.91$  ( $SD=0.50$ ))。

表1 質問紙の構成

1	私は、小学生に「漢字指導」ができる知識はあると思う。
2	私は、小学生に「漢字指導」が実際にできると思う。

表2 各質問項目の平均点と標準偏差

	講義前調査		講義後調査	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
質問項目1	2.28	0.61	3.13	0.39
質問項目2	2.09	0.54	2.91	0.5

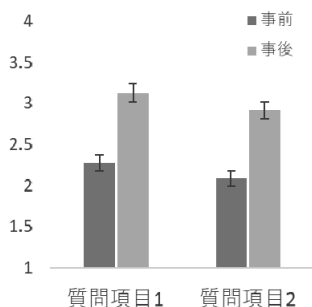


図2 事前事後の得点の変化  
(エラーバーは±標準誤差)

一要因（事前事後）の分散分析の結果、講義の効果はすべての項目で有意であった

（質問項目1 ( $F(1,46) = 78.46, p < .01$ ), 質問項目2 ( $F(1,46) = 55.88, p < .01$ )). 結果を表2と図2に示す。

#### 4.3. 考察

全ての項目で向上がみられたことから、本講義は、漢字ドリル指導の自信向上に効果的であることが示唆された。

## 5. 研究 2

### 5.1. 研究の方法

#### 5.1.1. 調査対象および調査時期

調査対象は研究1と同様、X国立大学教育学部の講義を受講する2年生(20名)と、Y私立大学教育学部の講義を受講する3年生(27名)計47名であった。調査時期は2017年6月～7月であった。

#### 5.1.2. 評価の方法

学生が、講義から漢字ドリル指導について、特に学んだこと、また、さらに学びたいと思ったことは何かを明らかにするため、講義の事前・事後に質問紙調査を行った。事前の質問紙は2問、事後の質問紙は3問で構成し、自由記述による回答を求めた(表3, 4)。回答の内容で、似たもの同士をまとめてカテゴリー名を付け、カテゴリーごとに回答者数を集計した。その後、調査対象である47名を100%としたときの、回答者数の割合を算出し、講義の事前と事後で回答の内容がどのように変化したかを比較した。研究1と同様、2か所で行われた講義を同様の効果が期待できる講義とみなして分析した。

### 5.2. 結果

#### (1) 知っている漢字の指導事項について

##### (Q1事前)

学生がもともと知っていた漢字の指導事項としては、「筆順」40名(85%)が最も多かった。次いで、「部首」39名(83%)、「読み」33名(70%)、「熟語・文章」29名(64%)、「成り立ち」「とめ・はね・はらい」がそれぞれ22名(47%)であった。

#### (2) 知っている漢字の指導法やその工夫について

##### (Q2事前)

学生がもともと知っていた漢字の指導法やその工夫としては、「空書き」37名(79%)が最も多かった。次いで、「なぞり書き」29名(62%)、「くり返しやる」「(同じ部首の漢字などの)仲間集め」

表3 事前の質問紙の構成

1	あなたが知っている漢字の【指導事項】をできる限りあげてください。
2	あなたが知っている漢字の【指導法】やその【工夫】をできる限りあげてください。

表4 事後の質問紙の構成

1	今日の講義から、漢字の【指導事項】について、学んだことをできる限りあげてください。
2	今日の講義から、漢字の【指導法】やその【工夫】について、学んだことをできる限りあげてください。
3	今日の講義から、小学生に漢字を指導するためにもっと知りたかったことを、できる限り箇条書きして下さい。

「声に出す」がそれぞれ8名(17%)であった。

(3) 講義から学んだ漢字の指導事項について

(Q1事後)

学生が講義から学んだ漢字の指導事項としては、「筆順の気を付けるべきポイント」27名(57%)が最も多かった。次いで、「7つの事項、又はその一部(7つの事項とは、模範授業で教師が実践した7つの指導事項・指導法で、①読み、②意味、③熟語、④筆順、⑤部首、⑥空書き、⑦なぞり書き、のこと)」23名(49%)、「速く回数を重ねて教える」12名(26%)であった。

(4) 講義から学んだ漢字の指導法やその工夫について(Q2事後)

学生が講義から学んだ漢字の指導法やその工夫としては、「空書きを、バリエーションを変えて、段階的にやる」29名(62%)が最も多かった。次いで、「テンポよく指導する」22名(47%)、「ICTで拡大・焦点化する」19名(40%)であった。

(5) 小学生に漢字を指導するためにもっと知りたかったことについて(Q3事後)

学生が講義から、小学生に漢字を指導するためにもっと知りたかったこととしては、「模範授業映像のような漢字ドリル指導の後には、どのような活動をしているのか」8名(17%)が最も多かった。次いで、「授業についていけない児童の支援方法」「テストについて」「どのくらいのペースで教えるのが適切なのか」がそれぞれ6名(13%)であった。

### 5.3. 考 察

講義前の回答結果から、教員志望の学生は、もともと漢字の指導事項をかなり知っていることが推測できた(Q1事前, Q2事前)。講義後の回答では、より具体的な漢字の指導事項や指導法・工夫を多くの学生があげることができていた(Q1事後, Q2事後)。このことから、本講義は、特に漢字ドリル指導のイメージを具体的に伝えることに効果的であることが示唆された。講義後の回答結果からは、漢字ドリル指導の授業、そのものの指導法だけでなく、授業後の活動や、授業についていけない児童の支援方法などについての講義も、今後求められる可能性があることが考えられた(Q3事後)。また、講義後の回答結果では、「7つの事項、又はその一部」と「ICTで拡大・焦点化する」以外は、講義スライドや発話セリフに示されていないものであった(Q1事後, Q2事後)。このことから、講義のステップ2で模範授業映像の感想を共有する時間があつ

たことや、ステップ3で指導法を練習する時間があつたことが、自分や他者が感じたことから学び取らせたり、自分の実感を印象に残らせたりするように働いた可能性が考えられた。

## 6. ま と め

本研究では、教員志望学生を対象とする、漢字ドリル指導法の講義パッケージの効果を、学生の自信の変化と、学生が学んだこと・さらに学びたいと思ったことから確認した。今後、講義による知識や技能の定着も効果の要因として検討したい。また、今回は2か所で行われた講義を同様の効果が期待できる講義とみなして分析したが、授業者や対象学生の違いによる影響の有無についても確認したい。

## 付 記

本研究は、日本教育工学研究協議会で報告した内容を加筆・修正したものである。

## 参 考 文 献

- 学校教材活用指導法研究会(2014)ベテラン先生直伝漢字ドリルの活用法。株式会社教育同人社、東京
- 堀田龍也(2015)教育再生実行会議第1分科会(第4回)配布資料、資料1 教育ICTの立場から次世代の学校教育への提案。  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/bunka/dai1/dai4/siryou1.pdf> (2018.4.1.確認)
- 石塚文晴、堀田龍也、小川雅弘、山田智之(2003)小学生を対象としたPDAを用いた漢字ドリル学習システムの開発。日本教育工学会論文誌、27:225-228
- 文部科学省(2017)教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(第4回)配布資料、資料3 教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方(案)。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/126/attach/1384253.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/attach/1384253.htm) (2018.4.1.確認)
- 佐藤和紀、高橋純、安里基子、斎藤玲、吉野真理子、堀田龍也(2017)教員養成大学における情報モラル教育の講義の実践と評価ーワークシートと学年の違いによる授業設計への自信の変化に着目してー。日本教育工学会論文誌、41:41-44
- 田中耕司(2014)教員養成系学部在籍する大学生を対象とした漢字部首指導の効果に関する研究。国語教育論叢、23:1-8

(Received April 2, 2018)